

2023 年度妊娠・出産に係る女性の調査報告

医療法人社団向日葵会まつしま病院 助産師 幸崎若菜

2023 年度妊娠・出産に係る女性の調査におきまして、自治労の女性部役員の方々と内容について一緒に検討させていただきました。このような機会をいただき、私自身も助産師として学ばせていただくこととなりました。産婦人科病院で様々な年代の女性に寄り添ってきた者としては、女性の健康と権利を守りながら、長きに渡って働き続けていく環境が整っていない社会だと感じています。現在の課題を明らかにするためにアンケートを実施させていただきました。ご協力いただいた 42931 人の方には感謝申し上げます。

では、その結果についてご報告させていただきます。

<結果>

回答者 42931 人（正規職員(再任用含む)：36751 人、非正規職員(会計年度任用職員、嘱託等)：6180 人(図 1)。年代は「10 代・20 代」：9275 人、「30 代」：10917 人、「40 代」：12737 人、「50 代」：8079 人、「60 代以上」：1641 人でした(図 2)。職場は図 3 通りです。

問 3 (1) 自分自身で産む・産まないという選択をできていますか。

「はい」：29613 人、「わからない・考えたことがない」：6200 人、「これから・途中」：5356 人、「いいえ」：1116 人でした(図 4)。

問 3 (2) 自分が理想とする家族計画(子どもの産む・産まない、産むとしたら何人産むか、どのくらいの間隔で産むのかなど)について否定的なことを言われたことはありますか。

「はい」：5014 人、「いいえ」：36937 人(図 5)

問 3 (3) (2) の間で①と答えた方にお聞きします。誰にどのようなことを言われましたか。

自由回答で 3623 件の回答あり。

問 3 (4) 妊娠・出産の時期について、自身で決められましたか。

「はい」：22230 人、「いいえ」：2749 人、「これから・途中」：8458 人、「わからない・考えたことがない」：8525 人でした(図 6)

問 3 (5) (4) の間で②と答えた方にお聞きします。理由は何ですか。(複数回答可)

「自身の体調(身体面・精神面を含む)」：1019 人、「体力(年齢も含む)」：496 人、「世帯の経済状況」：338 人、「出産費が高い」：41 人、「教育費等が高い」：148 人、「不妊治療費が高い」：210 人、「パートナーの協力がいい」：402 人、「育児支援者が十分でない・いない」：203 人、「家族の健康問題(療養や介護を含む)」：128 人、「保育所に入れない」：85 人、「その他の子育て支援が不十分」：277 人、「仕事が忙しい」：650 人、「育休が取れない」：59 人、「上司の態度」：123 人、「職場の人手不足」：469 人、「不妊治療休暇が取れない・日数不足」：141 人、「その他」：345 人でした(図 7)

<結果から考える課題>

問 3 (1) の設問に対して、選択できた方が 70%であり、「これから・途中」の 13%を含めると 8 割を超えていました。問 3 (4) の設問に対して、選択できた方は 53%、「これから・途中」の 20%を含めると 73%でした。出産をするかしないか、またその時期について大多数の女性が自身の選択を実現できていますが、リプロダクティブライツ（産むか産まないか、いつ・何人子どもを持つかを自分で決める権利。妊娠、出産、中絶について十分な情報を得られ、「生殖」に関するすべてのことを自分で決められる権利）は、人が当然持っている権利であり、他者から侵害されてはいけない権利です。その観点から見たら、問 3 (1) の設問に対して選択できなかったと回答した女性が 2%（1116 人）、問 3 (4) 設問に対して選択できなかったと回答した女性が 7%（2749 人）もいたことは助産師として社会の課題だと捉えます。これだけたくさんの女性たちが自身の選択を選ぶことができなかった本当の理由は彼女たち一人一人にインタビューしてみないとわからないことだと思いますが、このアンケートから一人一人の選択が尊重されない実情を垣間見ることができました。

例えば、問 3 (2) の設問であると回答したのは 12%（5014 人）でした。3623 件の自由記載から、否定的な発言をしたのは、夫を含むパートナー・義母・実母などの家族の場合もあれば、同僚や上司、仕事で関わる住民、驚いたことに首長からの発言もありました。発言の内容は、産んだ子どもの人数（少ないことや多いこと）や間隔を非難されたり、職場内の人手不足や育休を取得する期間について嫌味を言われたり、妊娠のタイミングについて制限や圧力を感じる発言をされたりと、セクシャルハラスメントやパワーハラスメント、マタニティハラスメントに該当する言動が散見されました。また、産まないことや結婚しないことの原因を聞かれたり、非難されたという回答もありました。回答を読みながら、リプロダクティブヘルス・ライツがまだまだ世間一般には浸透していないことを痛感させられました。他者の価値観を押し付けられたり、自身の選択を強く否定されたりという経験は辛かっただろうと思いつながりながら読ませていただきました。

また、問 3 (5) の設問では複数回答ですが、30%が身体的な問題、28%が職場の問題、15%が経済的問題、14%が家族の支援体制をあげています。

自ら希望するタイミングで妊娠したいと思っても、様々な事情から実現できていない実情があります。しかし、これらの問題は妊娠する当事者だけの問題ではありません。特に約 3 割もなる職場の問題の内訳は「仕事が忙しい」「育休が取れない」「上司の態度」「職場の人手不足」「不妊治療休暇が取れない・日数不足」であり、これに対しては対策を講じることで解消していけるのではと感じます。

また、理由として一番多い身体的な問題についても、日頃の健康管理や適切な時期の医療の介入によって回避できる健康問題もあるかもしれません。高齢での妊娠は、出産のリミットについても考えることは増えますし、合併症のリスクが高くなることもあります。問 3 (1)・問 3 (4) の設問で「わからない・考えたことがない」と回答しているのはそれぞれ 15%と 20%でした。自身のキャリアや人生において、妊娠をどのように考えるのかという

キャリア教育が日本では不足していると感じています。自由記載には、夫婦間で家族計画について共通認識を持たずにいたことが要因と推測される発言もあり、それにより傷つけられたであろう女性の声もありました。妊娠を希望するのかもしれないか・いつ産みたいかはひとそれぞれであり、自身の望むキャリア構築・自己実現のためにも、リプロダクティブライツとしての家族計画はとても重要であり、自身と家族の健康や生活を加味して、自分たちはどのように妊娠・避妊を実行していくのかを話し合う機会を持つことも不可欠だと考えています。

<まとめ>

現代の社会において、結婚・出産・育児に関しては多様な価値観や家族の形があります。女性の社会進出が当たり前になったのにも関わらず、家庭内における家事や育児の分担もまだまだ女性が多く担っている実情があります。男性の育休取得率も職場環境によって異なるもののまだまだ低い状況にあり、政府が取得率を目標に掲げるほどです。本当の意味で男女平等の社会の実現はいつ来るのかとも思いますが、私が助産師になった約20年前よりも着実に家事や育児に参画する男性は増えていると感じています。諦めずにできることを積み上げていくしかないのだとも感じています。

最後に、今回の調査において「妊娠・出産のようなプライベートなことなので回答はしたくない」とか「答えたくない」「こんなことを聞くこと自体どうかと思う」といったご意見もありました。不本意である気持ちを表出していただき、また回答しないという選択をとっていただき、ありがたいと感じました。回答しないことも権利ですし、「生殖」に関するすべてのことを自分で決める権利を持っており、自由記載の中に多様な意見があつて当たり前だと感じています。アンケートの前文に回答しない権利について、明記しなかったことについてはこの場を借りてお詫びしたいと思いますし、また女性は産むことも産まないことも自分で選択できる権利を持っていることをここで今一度確認しておきたいと思います。

産みたいと思う人が望むタイミングで産める社会であり、産まない選択をとる人が虐げられない社会を実現するためにはまだまだ課題が山積しておりますので、その解決にむけて考え、行動していきたいと思っています。

非正規職員
(会計年度
任用職員、
嘱託等)
14%

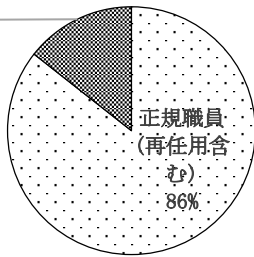


図1 雇用形態

60代以上

4%

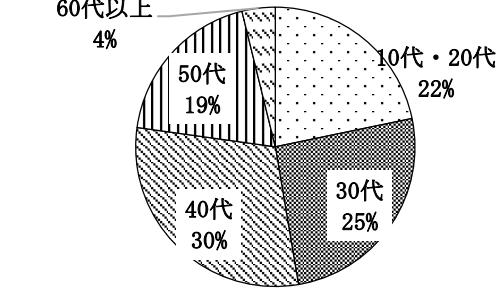


図2 年代

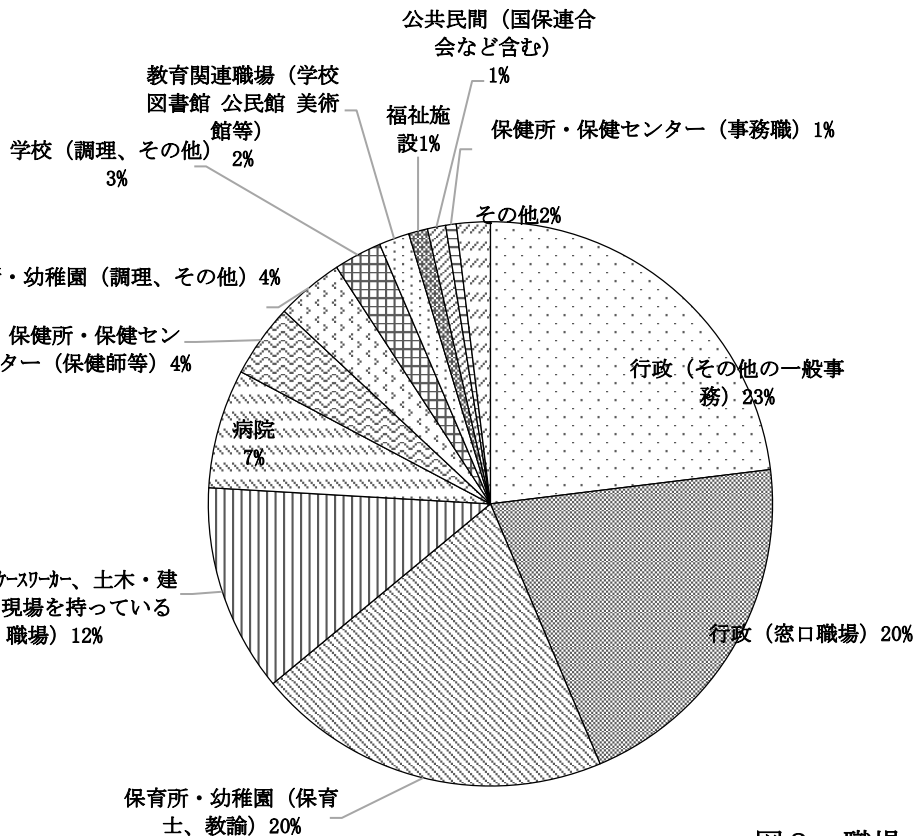


図3 職場

これから・
途中
13%

いいえ
2%

わからな
い・考え
たこと
がない
15%

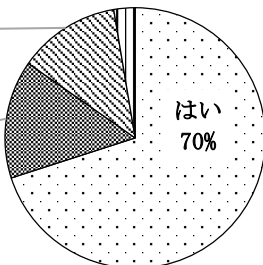


図4 自分自身で産む・産まないの選択
ができていますか

はい
12%

いいえ
88%

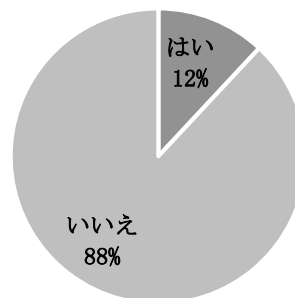


図5 理想とする家族計画で否定的
なことを言われたか

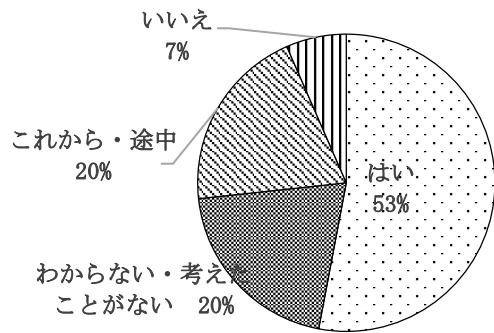


図6 妊娠出産の時期について自身で決められた

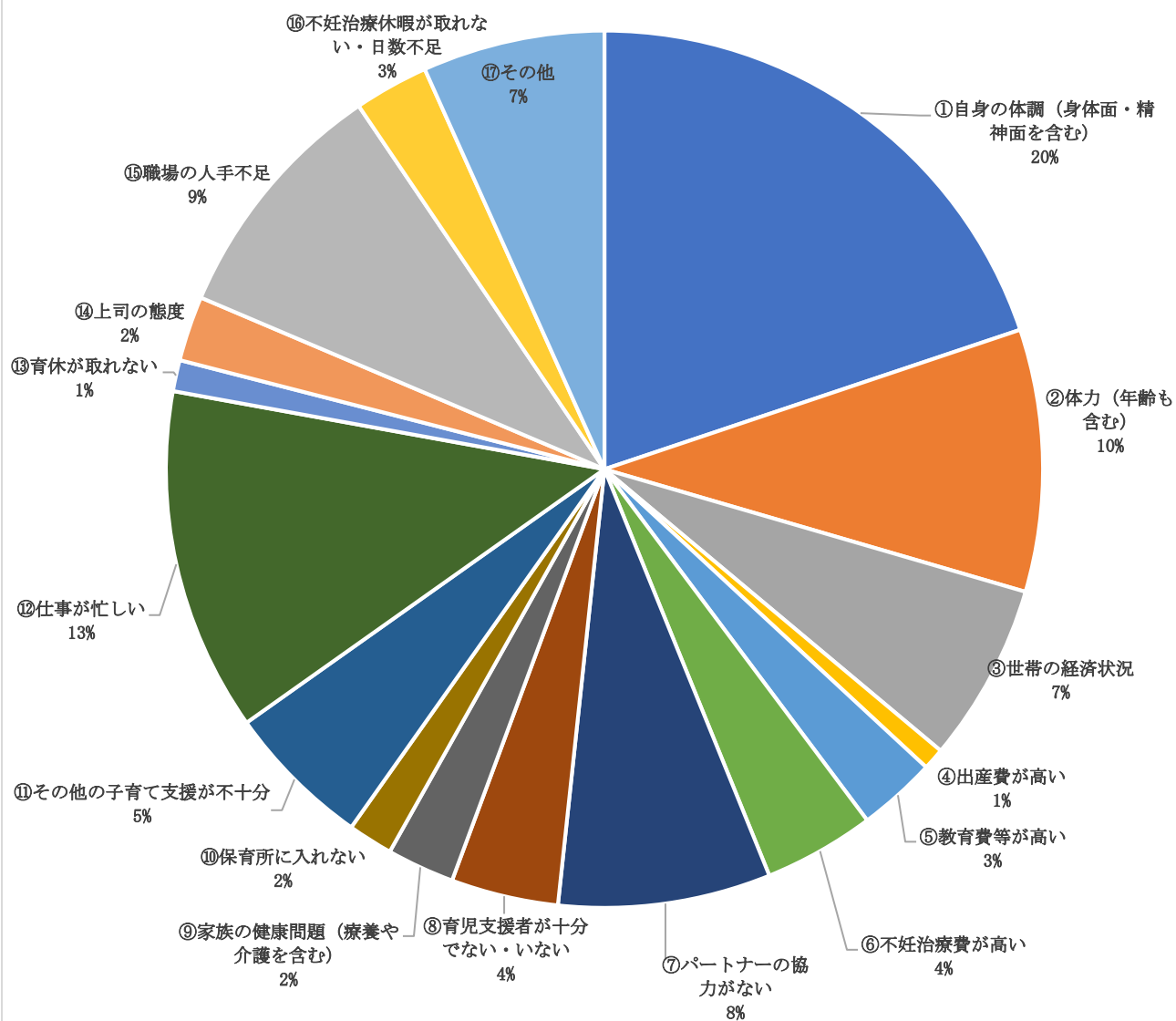


図7 自身で出産のタイミングを選べなかった理由